

麻生路郎★主宰

川 柳 雅 証



文藝賞  
記念特輯  
受賞

No. 246

昭和二十三年九月二十一日発行  
創刊大正十三年十一月二十一日発行  
第百四十六号



# 續川柳講座

(7)

麻生路郎

## 鳥獸蟲魚の句に就て

鳥獸蟲魚の句は、鳥獸蟲魚の動作や性状や環境を詠んだ句と、鳥獸蟲魚を人事に配した句と、作者の心境や觀察を鳥獸蟲魚を藉りて表現した句とに大別することが出来るやうであります。

アメリカのソシアリスト、ジャツク、ロンドンには社會主義を宣傳する方便として、狼の群のこなどる小説にしたことがありますが、鳥獸蟲魚の川柳によつて、ソシアリズムやコンミニニズムを、吹き込まうとした作家は出てゐません。しかし、そうした思想のあらはれと云つてもいゝ句はあるにはあります。

蟻を見給へプロレタリアート 諸君 (牛文鏡) と云ふ句があります。更に、従つてゆかねば犬の首しまり (雅 幽) と云ふのがあります。「蟻を見給へ」の句が、蟻そのものを詠んだ句でなく、作者の思想が、斯うした短詩型文學によつて描出されたものである

ことは説明するまでもないでせう。「従つてゆかねば」の句にしまして、表面は犬の環境を寫生したものとて、うけとれますが、ホンドの句意は資本家に對する作者の反抗を詠んだものであります。しかし、

靡下に乗るは鷄ばかりなり (二柳子) の句になりますと、そうした資本家に對する反抗ではなく、鷄によつての心境の寂しさを描出した句であります。従つて鷄は一つの景物として扱はれたのに過ぎません。

愛犬ホス けなげにも家主の犬を噛んで来た (恒 平) と云うのがあります。これなどは、反資本家的の思想の表はれだと云へば少し大げさに過ぎますが平素の資本家に對する潜在意識が、たま／＼愛犬の行動によつて首を擡げたことだけは確かであります。

斯うして、鳥獸蟲魚を藉りて、憂鬱を發散させようといふ手法がいゝか悪るいかは別として一つの手法には違ひありません。

ところが、身勝へたまのかまきり肩が凝り 熊蜂は胸毛が痒ゆくならと 飛び 水すまし退潮すると流れに出 溜息も光ると知らず螢居る (同) あを空の雷さを蟻まだ見てる (同) かつむり終別急ぐ用もなし (同) 鷄があわてて自轉車もあわて (京三郎) 仕合はせの悪るい蛤街へ出る (輝 梨) ライオンは何を小癩な顔でゐる (路 生) すき見する脚ざりで来る鶴なりし (同) 見てゐても動くものかと鰻のゐる (橙 金) 粟田口牛も草鞋をはきかへる (東北) 這入らうかなと窓の蜂飛んでゐる (磯 松) 子子はかはりばんこに顔を (十五夜) 出し 蒼翠へ蜻蛉使ひに行く姿 (恒 平)

等々々の句は作者が常に懷抱してゐる思想を盛り込んだと云う句ではなく、たま／＼タツチした句境を擬人法で生かしたのであります。と同時に、鳥獸蟲魚の動作や性状や環境がその句の構成分子となつてゐることは云ふまでもありません。鳥獸蟲魚の句にはこの手法によつたものが可成



## 路郎を語る

### 一生の獅子吼

福田山雨樓

路郎先生がこれまで四十幾年の間闊いぬかれた川柳の道は、決して生やさしいものではなかつた。叛逆者、離反者も出た。しかしその都度先生は自分の節を枉げようとはされなかつた。曲はあくまで衝き誤まれるは正された。意れば鞭打たれた。しかも去る者を追われなかつた。

先生にも短所がないわけではない。けれども先生の場合はその短所が却つて長所となつてゐることに氣付き、自分の淺はかな思慮を恥ぢたことは一再でない。先生の鞭や激勵の言葉が強いために居たたまれなくて逃げ出した作家もあつた。先生が川柳に向われる態度は餘りに眞剣であり、死にもものぐらゐであつた。弱氣儘な作家がついて行けなかつた所以である。けれども先生は機軸をとつたり頭を撫でたりはされなかつた。先生のかぎひしさ、強さはいつまでもかわるところがない。自分も今以て作句上について絶えず痛痒をくら

つてゐる一人である。先生は若い頃先輩無用論を唱えられたことがあると聞いてゐるが、これはだらしのない先輩、舊態依然川柳の質的向上に對して熱意のない先輩を排撃されたのだと思つてはならぬ。「川柳雜誌」が創刊されてから二十四年、先生の青年時代からすれば實に四十幾年に亘つて、川柳と四つに組み、六十才の今日迄不退轉の意氣と情熱とを捧げ、川柳のためその進展向上のために一家をあげ、身を命を賭して闘ひ續けられた路郎先生のような指導者がまたあるであらうか。自分は時々先生に注文をつけた。いゝような氣にかられることがある。が思ひきつて先生のお叱りを

EXTRA FINE SHIONO CHEMICALS 日本薬局方 ビタミンB1剤

疲勞恢復と 榮養補給に

**ネオパラトリン**

塩野義製薬株式会社

多いやうであります。鳥獸蟲魚を直接に詠むほど至難でないのが作品の多い原因でせう。しかし、「蜜蜂は」の句、「水すまし」の句、「溜息も」の句、「ライオンは」の句、「蒼空へ」の句など、それらの簡性が巧みに織り込まれてゐて、うれしい句であります。感覚がよほど鋭敏でなければ捕捉し得ない句であります。

次に鳥獸蟲魚そのものを寫生した句を少しく拾つて見ませう。

池の鶯鶯月をよせたりひろげたり (古句)

龜の脊で暫し骸がおどるなり (町二)

兒が追へば鳩は歩いて逃げるなり (豆秋)

雪雫ひ馬の鼻息地に風き (美錠丸)

捨てられた猫の子二匹雨が降り (右近)

標本の鱧は背伸びをした形 (一貫子)

斯うして並べて見ても判るやうに、鳥獸蟲魚を直接に讀んだ句は、擬人法の句に比べて見劣りがいたします。寧ろ鳥獸蟲魚は詠まれてゐても、鳥獸蟲魚そのものを主として詠んだのではなく、次のやうに人事に配される時、句が一段と光るやうに思はれます。

蟬取つた一人へみんなついで行き (大夢子)

鳩を飼ふ役で新聞社に勤め (三萬史)

聲いから猫が鳴いても腹が

立ち (豆秋)  
贅澤をしつくしてから虫ゐる (白樂人)  
蚊は出たが蚊帳はモシ且那ごうなさる (古句)

以上句に就て見ても、「蟬取つた」の句は蟬の句といふより、蟬取つたことを詠んだ句であり、「鳩を飼ふ役で」の句は鳩を詠んだ句ではなく、新聞社に勤務してゐるサラリーマンを詠んだ句であります。新聞社に勤めてゐるといふのに、記者ではなくて、鳩を飼ふ役だといふので一沫の淋びしさを感じてゐるさまがよくあらはれてゐます。「暑いから」の句にしても猫が主人公ではなくて、腹を立てる方が主人公であります。「贅澤を」の句も、虫は従であつて、この句の描いてゐるものは贅澤をしつくした男の方にあるのであります。「蚊は出たが」の句は質屋の藏にある蚊帳に重點があるのであります。

右に述べました外に、鳥獸蟲魚に對して、作者が觀念的に作りあげる手法の句があります。

一羽でも三羽でも鶯鶯あはれなり (古句)

琴柱ほど霞の中をかへる雁 (同)

白魚の日は楊貴妃の手のほくら (同)

などが、それでありませうした句には作爲のあとが仄

かに見えて、その句の價値を割引させるものであります。「一羽でも」の句について申しましても鶯鶯といふものは番ひで水の表面に浮んでゐるものであるといふ觀念の下に作句されたもので、「一羽でも三羽でも」といふ理屈つばい考え方が、この句としての難點なのであります。殊に鶯鶯と云ふ鳥は鶯鶯の契りなどと云つて大變仲のよい鳥とされてゐますが、事實は非常に浮氣っぽい鳥で、水の上で番ひのやうに浮んでゐるが、次の瞬間には他の波に乗つて他の番ひとなつてゐるといふ鳥ださうであります。その點、「琴柱ほど」の句も觀念で、でツちあげた句には違ひありませんが、琴柱(ことじ)の比喩に一片の興趣が湧かないこともありますまい。「白魚の日は」の句は全く技巧倒れの句で、こゝまで理智を働かした句は常に失敗に終るものであります。

鳥獸蟲魚の句を作る手法の一つとして擬人法のあることは前に述べましたが、單なる擬人法でなく、鳥獸蟲魚と作者とが同格となる手法のあることも知つていたがきたい。

ワン／＼よ氣の毒なが米が (豆秋)

これは、俳人一茶が「雀」を友とした句境と等しいものであります。

覺悟でペンを握つても、見えざる先生の重壓感に壓倒されて筆が進まない。ところが自分も漸く馬齢五十に達し、元氣の衰えもあつてか、圭角がとれかかつて來た。と同時に心眼も開けて熟思して見ると、先生に對する注文は一知半解の短見であることに氣が付いた。これ迄通りでよいのだ。このまゝで先生は一生を川柳のために獅子吼されればよいのだ。と思うやうになつて來た。元より先生の御加餐を祈つてやまないが、たとへ御微恙のときでも、先生はこれを天が與えた休養なりとして甘受されてゐるのである。

川柳と云えば先生を思い、精進を新たにせねばならぬことを希うのみ。

曾て師の曰ク 「阪大川柳會に出ると醫博や教授や醫長と言つたお歴々から、又有恒俱樂部川柳講座に於ても大阪財界の名士連から、先生の禮遇をされて居るが、その人たちの立場へ行つた時には、その人たちの立場を考へて、何々先生はあらつしやいますかと、何々事務さんはお居でになりますかとといふことにしてゐます……」と。

師の御人柄が日に浮ぶ様である。

師と私は同年生れであるらし

路郎師と呼ぶ方が一層の親しみを覺ゆる様に思ふ。

伊賀・伊勢方面へは のりば 上 六

河内・大和方面へは のりば アベノ橋

# 近畿日本鐵道

# 川柳塔

兵庫縣 戸 倉 普 天

風呂敷に包むと米の哀れなり  
差當り一つならべて店を出し  
採算はどうあるうとも麥を踏む  
闇肥料やつぱり利いて麥青し  
親しめば土にチツトも嘘がなし

伊丹市 岩 崎 柳 路

梅一輪追放の師の部屋に咲き  
梅田新道よオと焼酎の友と合ひ  
寒いので一緒に寝よう老夫婦  
十圓の卵へ竹づんで見る病上り  
良い女あれも敗戦未亡人  
超満員パーマネットに撫でられた  
ラッシュを避けて大阪へ出るいゝ暮し

奈良縣 上 田 翠 光

苗代の足跡父のふたなぬか  
夕風は螢へ少しきつすぎる  
夜の初瀬寺を訪ふ

横濱市 福 田 山 雨 樓

三十年庶務哲學がチト判り  
長男を戦死させた畏友A氏に  
南海に子は生きてゐる父母の胸

堺 市 戸 田 古 方

寝言まで云ふグロブだが買へず

尼崎市 水 谷 鮎 美

谷口綠葉居にて(二句)

お留守ばんふたりになつた賑かさ  
そうやのし君の眼鏡の腫がすみぬ

旭川市 宮 田 不 二

抜打ちの榮轉母を驚かせ  
水平線の様な氣持ちになぜなれぬ  
見晴らしに人家は小さきくもの  
御普請の何屋と見れば小料理屋  
見離した様に電燈消えちまい

大阪市 福 田 安 夢

焼けた者同志で話よくはづみ  
いゝ人がみな逆境にゐる事實  
春の日はボカく自轉車盜まれる

奈良縣 西 垣 錦 風

二日酔ひメチじやないかと妻案じ  
妾宅は旦那の闇の取引所  
看護婦と産婆を持つて嫁にゆき  
デモ側も會社を潰す愚を悟り  
實のどこ會社も闇でいきをつき

大阪市 市 場 沒 食 子

一年生座席うれしく撫でてみる  
芋腹だ押ししてくれるな冬の風  
素人に割かれて鰻あはれなり

名古屋市 吉 田 水 車

### 第一回國會

春うらゝ、ばさみ、ほうちよう、かみそり研ぎ  
生きてゐてよかつたと春の夜を歩く  
ちち、ははにめぐりあひたや靴みがく  
ほどけさん、これ十圓のまんぢゆです  
闇の魚屋さかなの名は知らず  
ピストルが何所かで鳴つて秋の月  
雪さらさら厨に齧泣いてるよ

大阪市 須 崎 豆 秋

一も戀二も戀映畫春近し

大阪市 竹 内 潮 花

### 師曰ク

「伊聖芭蕉は東北にまで其足跡  
を遺して居るが、僕はもつと廣く  
滿蒙にまで川柳行脚をやつた。芭  
蕉は、逃避的だが、僕は積極的だ  
よ……。」と。

又曰ク

「今の世に俳句で飯を食つてる人  
はあつても川柳で飯を食つてるの  
は古今東西を通じて、まあ僕位な  
ものだよ……。」と。

こんなことを戯談のやうに言ふ師  
である。

### ◎

師は時に談論風發、當る可から  
ざるの概がある。  
政治、經濟、筆事、外交、文藝、  
美術、風俗、其他何でもそれぐ  
一家の見識を持つて居られて、而  
も其話振りが大變お上手であるか  
ら聽いてる者がいつの間にかチ  
ヤムされて終ふのである。  
先年代議士に立候補されたのも  
「今の爲政を黙つて見て居れぬ」  
からであつたらしい。

師は又偉大な頑張り屋さんであ  
るらしい。

嘗て病院にかつき込まれて身は  
焼くが如き發熱中であるにもめげ  
ず、に、仰臥のまゝで「川柳雜誌」  
の編輯の指揮もすれば「週刊朝  
日」の原稿を口述して責を果され  
たと云ふ事は今に残る有名な話で  
ある。

近くは去る戦災の頃、伊賀に疎  
開ときめられたが、トラックも馬  
力も容易に來てくれぬ折柄、師は  
當時十六才の令息と共に車力を曳  
いて途中三晩泊りて大阪から上野  
市の東方一里餘のところへ家財道  
具を二往復で運び了せられたと言  
ふ有名な挿話もある。  
こんなに思ひ立つた事にはご  
までも眞剣にならるゝ師である。

清談・商談  
お待合せに

## 喫みどり

みざりでの商談  
運が向いて來る  
上六交又點西北角

### ◎

師は容易に凹みぬ人であるらし  
い、別號を「不朽洞」と稱し「不  
死鳥」と唱へらるゝ處蓋し「宜な  
る哉」と首肯し得らるのである。  
「配給が少なければそれだけで  
よい」「物が無ければ、無いだけ

ロークツの灯もよし物を思ふ身に  
埋葬が濟めば女の笑ひ聲  
望まれて櫻吹雪の下で舞ひ  
革命の唄からしはし遠ざかり  
水盤の水へ心の波が立ち  
妻思ふ日もあり針を運ぶ身に

滋賀縣 北川 春巢

名も知らぬ同士ヤミ屋で馬が合ひ  
たまさかのすき焼停電長いこと  
マスクして鏡見直す女なり  
着任は美人の多い事も云ひ  
葬式へ新しい下駄おろされる

大阪府 西尾 葉

不整頓といふは石屋の店であり  
仲居さんも一口のりたい閑話  
スラスラと特許番號香具師は言ひ

開業

開店の算盤一桁あはてたり

保護者會長就任

會長は寄附のことからもちこまれ

手を拭いて新入學の子を送り  
メチールでそうかそれはとかたづけ  
嘘の世に兵隊靴のカネがちび  
怪しまれつけてリツクサツクも疲れ  
養老と受け取る頃の身を案じ

滋賀縣 鈴木 石鹿

供米がどうのこうのと胃散のみ  
霜ふんで来てまで買出し断られ  
其の筋を押さへる爲の重役さ  
腕章にHUNTERをありイタチさげ  
賽銭箱音のせぬのを淋しがり

英靈を待つ祭壇も草疲れて  
閑慎など聞くなどライターすつてやり  
燃料飢餓

大阪府 高田 抱逸

創意から大牟田川の泥が燃え

出雲市 緑之助

ともすればそれが句になる子澤山  
お茶菓子へうつかり慎みしてしまひ

下松市 弘津 柳慶

無神論君もたんまり蓄めたとか  
日曜の朝だお茶でもいれないか  
當用漢字お経どうにもならぬなり

大阪市 稻葉 鳩花

猫の子もきちんと坐る御命日  
アトリエの畫家も舞妓もやせてゐる  
弟の様に女にあつかわれ  
ブルースだタンゴだ養子派手にやり

○

西宮 鳥山 一步

おどろきはコハクの色爪のいろ

金澤市 安川 久留美

いよ／＼そろ盤の要る飲仲間  
土のいろ草のいろ端々錢のいろ  
モミ殻に高い卵はきりやうよし

松山 前田 五健

ミスボリス笑えばやはり娘さん  
香水の話ダンスの順を待ち  
雲は急同權論が雨になり

大阪市 橋本 緑雨

風除の椿一足前へ落ち  
三人の話火鉢は雪のこと  
手袋の白さは妻のこゝろかな

で済して行く」と仰せらるるのである。

あの細い體で非常にいそがしく  
飛び廻られても「仕事の都合では  
二日三日の徹夜も平氣である。」と  
仰せらるゝのである、そして常に  
席暖まる暇もないいそがしさにあ  
りながら俺は容易に「磨り切れな  
いよ」と仰せらるゝのである。

こんな不死身の我慢強い師で  
ある。

最後に師を問ます工夫は唯一つ  
ある。

「師は大變な煙草好きである。巻  
煙草にパイプなどを使つて居れぬ  
程の強い愛煙家であるから其煙草  
を挟む指の先も若干ヤニと煙で焦  
けて居る位である。だから煙草な  
くして選句も起稿も覺束ないらし  
いのである。

こゝを附け込んだ譯でもないが  
去る年、師を丹波の山奥の普天居  
に誘つて二日一夜の滞在を願つた  
のであつた。

果して大阪から持つて來られた  
御用意の煙草も盡きて終つたが、  
幸か不幸か此山奥の私の一寒居に  
は配給以外に煙草の購買ひなど出  
來る筈もない。辛うじて喫ひ残り

の刻煙草を、ヤニのつまつた古煙  
管で差し上げたのは師に對し誠に  
御氣の毒であつた。この煙草不足  
には師も少々凹まれて勿々御歸り  
になつたのであつた。

この事あつて後、師を問ます唯  
一の工夫は師から煙草を取り上ぐ  
るに限ると、私に獨り苦笑しつ  
つ考へて居るのである。阿々。

(丹波)

川柳に生きる人

細呂木魯木

私の半生は川柳の生活であつ  
た。私は私の好きな川柳が、何時  
迄も謂はれなく社會からは誤解さ  
れ、文壇では下積にされてゐるの  
を慨し、此處六年間は其の纏縛か  
ら解放されること、廣く社會に  
川柳を浸潤せしめて、ほんとの川  
柳がなんものであるかを、知つ  
て貰ふため、川柳の社會運動に没  
頭してきた。そのためには雑誌  
「川柳雜誌」の刊行を續け、機會  
をとらへては東西南北に足を運ん  
で、體驗が生む力強い川柳に就い  
て説いた。近頃漸くその曙光が見  
えて來た。然し前途は未だ未だ遠  
い。擔ますその道に精進したいと  
思つてゐる。(以下十頁へ續く)





# 麻生路郎師

## 文藝賞記念川柳大會

主催 川柳不朽洞會

六月一日午後一時から、麻生路郎師の文藝賞受賞記念川柳大會が、川柳雜誌社ならびに大阪文化協會後援の下に、住吉の生根社ではなげなく開催された。早くからつめかけた柳人達が黙々として想を練り筆をうごかしてゐる。

總て司會者西尾栗氏立つて開會を宣すれば竹内潮花氏開會の辭を述べ、續いて、不朽洞會理事長中島生々庵博士がメモを片手に、謙讓な手堅い挨拶をはじめめる。それが万雷の拍手にかこまれた路郎先生への記念品贈呈へとつづく。

來賓側から橋元紋太氏が魂をぶつつけたやうな祝辭があり、記念品を前にして先生の言葉少なな感激あふれる謝辭があつた。

場内が靜寂と冷靜にかへつた頃、講演「私と餘生」の紹介とともに三度、黒いモウニングとよき調和をもつ白髪之路郎先生が病軀をおして登壇「世界の偉人は私たちに何を教へてゐるか」と發句されて、彼れ等偉人が事を成しとげるためには長命と、貧に立ち貧に勝つたこと、次に時間を無視し

た努力、尤もこの努力と成功とは必ずしも正比例はしてゐないこと、最後によりよき協力者が必要であることを力説された。これ等



(師郎路るれらへ述べ辭謝の感激に前を品念記)

の例證として、エスベラント語の創始者サメンホフ博士の陰の人として岳父の協力を力説され、更に、マルクスにエン

を川柳のため、國家のため、吾人類のためにお願ひする。

最近、俳句の第二藝術云々が叫ばれた。それは芭蕉が俳句を第一藝術たらしめ、後人が第二藝術に墮せしめたからである。現在川柳を第二藝術として攻撃する人はゐない。川柳はまだ広く社會に第一藝術としての認識さへされてゐないからではないか。(先生卓をたいて高く強く叫ばれる)我々がこれを第一藝術として完成させない限り、第二藝術云々の日は來ないであらう。今は諸君の協力によつて、ひたむきに第一藝術へべく進する餘生を持つのみであると結ばれて降壇された。(感激の拍手起る)

先生の長講一席は近年稀に見る大獅々吼であつたが、拙筆はそのアウトラインすら傳へることが出來ないのを遺憾とする。

次いで番傘川柳社の勝間長人氏の挨拶があつて、芥川龍之介作の「蜘蛛の糸」の紙芝居を小谷蓮乘氏がフットライトつきで演出されたのは一服の清涼劑、こゝで、司會者栗氏が、各地からの祝電を發表謝意を表された。

いよ／＼席題から披露がはじまる。遠く出雲市から出席の不朽洞會員尼縁之助氏をトップに、犬山の山田有町氏、京都の今村良之祐氏、堺の勝間長人氏、西宮市の橋元紋太氏の披露があり、續いて兼

題の披露が不朽洞會員の清水白柳子氏、市場没食子氏、水谷鮎美氏、葎乃女史、路郎師によつて行はれた。披露終つて、奈良縣むつみ社の深井凡々氏立つて、御不快にもかまはらず兼題の披露まで滞りなくすませられたことを賀し、先生の平素に於ける篤學ぶりをたへれば、筆陣の雄高驚亞鈍氏が、川柳への再出發を約された。

なほ、漫畫家種瓜平畫伯が特に本會のために來授され、出席者の希望に應じて川柳漫畫を色紙に揮毫分讓せられ頗る好評を博された。

最後に、作品の成績發表があり、二十二點の角嵐氏を一等に、十五等まで入賞、十六等は残念賞、賞品は生々庵理事長より、うや／＼しく授與。一同喝采。

閉會の辭は筆者古方で、シツカリヤロウ、ヤロウ、ヤロウと唱和の音頭取りをすれば一同これに和され歡聲を搖がし、定刻を一時間餘も突破した六時過ぎ大盛會裡に大會の幕を閉じた。

(記録係 戸田古方記)

會後、改めて同會場に於て、遠來の珍客、紋太、良之祐、有町、呂香、小壺、正穂、縁之助、風來子等の諸氏と不朽洞會員の有志、生々庵、香林、鮎美、水客、小松園、白柳子、竹莊、好郎、翠光、紫香、潮花の諸氏と没食子が、

路郎、霞乃兩先生並びに、洞友縁雨氏を中心に、酒杯を手に交歓が行はれた。尤も時間の都合で、多くの方々にお残り願へなかつたことは甚だ残念であつた。終りに、陰の舞ひの板場を特に擔當せられた竹莊氏の勞を多とする。

(記録係 没食子記)

出席者 路郎師・良之祐・正穂・呂香・有町・小壺・月都・風來子・青丹子・清峯 凡々・文女・岸柳・京介・夢裡・翠光・好郎・香林・葉・鳩花・紫香・水客・庸司・政人・琴人・叙太・鮎美・晋水・白雨・妄夢・角嵐・勢三・三窓・潮花・古方・溪堂・竹莊・没食子・鐵史・銀羅漢・綠雨・彩峰・瓜平・登龍・小松園・雅美・詩朗・晴峯・亞鈍・野介・種美・翠露・多門・史葉・露芳・松太郎・長人・登詩夫・喜代志・文柳・千舟・よしを・茂・逸水・立美・ひとし・はるを・使君子・作太郎・陽人・葉平・古泉・縁之助・醉月・恒良・方眠・悦子・祝平・生々庵・白柳子・岳仙・遠見路・蓮乘・霞乃・一步 出向者 白鷺・死生・風石・亞人・嘉市・

不朽洞句抄

片山首相に捧ぐ

さあ動きまゝと片山運轉手

天皇を迎へて(十五句)

パン食が濟むと行幸時間が来 おなじみの帽子を今日も手にまかせ 天皇への役人が邪魔になり お氣の毒あれ〜帽子 振りたまう オープンへ迫るは初夏の民の呼吸 天皇へ雨も埃りのたたぬほど 視て欲しい慾へ天皇はくえまれ

康純・飯風・水車・義一・卯生木・迷觀 子・柳慶・謙和・弘法・晟修・勝介・不 二・曉明・映・齊・昌子・白林・益榮 えいを・雷相・義風子・藤雨子・葉光・ 達子・ちか・光代・幸子・蠟鯨・鯨斗・ 魚行

兼題「祝辭」

市場没食子選

何んやら喋つてを祝辭と致します 葉平 卒直な祝辭主客をば、えませ 不 二 老婆も陰のひととなり祝辭とす 呂香 兼題「温泉」 清水白柳子選 信濃なる湯宿の冬のあたゝかき 紋太 巴斯山の腹に光つて湯街暮れ 一映 晝を臥て温泉宿の紙幣束よ 鮎美 兼題「子澤山」 楢元紋太選 子澤山とくく、燈れた灯がうれし 鮎美 ざうならと食ふて行く氣の子澤山 彩峰 子澤山賣りにゆくほどパンをこれ 祝平 庖丁を誰が使つた子澤山 紋太 兼題「父」 麻生路郎選 道樂も息子にゆすり枯れてゐる 亞鈍 年四十まだ叱られる父を持ち 竹莊 金持ちになれとはいわぬお父さん 有町

麻生路郎

顯微鏡のぞく幸福持ち給ふ 未亡人として天皇へ涙ぐみ 義足へは天皇お眼を伏せ給ひ 天皇も人氣といふを御發見 親しさはお食事までも書きたる 妃殿下に出てはかつた受話機持ち 大阪も海が見えますほのぼのと 天皇へ民のかまどが停電し 古くとも僕には仁義禮智信 父母のなげきをおもへ強盗

兼題「友白髪」

麻生霞乃選

石段の敷を見上げる友白髪 不 二 友白髪誦の聲もおとろえす 水客 友白髪もう緩やかな帯に馴れ 庸司 友白髪ぬき合ふひまもない夫婦 霞乃 兼題「恩師」 水谷鮎美選 棒落つ恩師と對坐したまふま 安夢 まさか易者が恩師とは知らず 銀羅漢 功成つてからが恩師へ無沙汰勝ち 勢三 キヤパレーで恩師を見つけたら 鮎美 兼題「切符」 勝間長人選 米原へ行けばどうにかなる切符 登龍 まだ切符ホケツの指にふれて来ず 古方 片道が帽子にあつて灯を歩き 角嵐 プレミアム付きの切符を見せ歩き 長人 兼題「拍手」 尼縁之助選 非常口歸り支度も拍手する 登龍 受付は拍手を遠く聞いてゐる 良之祐 花束を拍手に怖ぢぬ瞳で捧げ 角嵐 兼題「單衣」 山田有町選 ナフタリン臭い單衣が着てみたし 勢三 單衣も夏は住みよし暮しよし 京介 瀟洒たる單衣が軽く二本撞き 良之祐 ゆかた着た日の夕刊のタブレット 有町 兼題「盃」 今村良之祐選 遅刻してくれば盃とんで来る ばるを 盃の亂れるころにそつと立ち 多門 盃に縁なき衆生 平社員 立美 盃を伏せ夕刊へ眼をうつす 良之祐 盃をさゝれ困つた顔になり 同

會前、會後の事ども

★「私達の路郎先生が、去る二月十日、大阪府知事から文藝賞を授與せられました。これは文化國家を目指す新生日本の政治のよりよき一つのあらはれたと存じます。先生の榮譽は申す迄もありませんが、我等門下生一同にとつても寔に感激措く能はざるものがあります。茲に先生の受賞祝賀とこれを記念するため、左記により川柳大會を華々しく開催いたします」云々の檄を全國に飛ばしたのは總選舉のさはめきも一段落をつけた五月中旬のことであつた。度々の

準備委員會、實行委員會の手を経て六月一日にやつと、その日を迎へることになつた。主催者川柳不朽洞會としては當然のことではあるが、恩師のよろこびをよめるこびとするためにさしつけられた役員や會員の努力は倫理性が地を拂はんとする終戦後の世相に對して近頃の快舉であつた。

★數日前から引ついで、當日の午前中まで、不朽洞會の面々、先生のおすまひ帝塚山の不朽洞に集る。賞品の仕入に走る好郎紫香の兩氏、アルコールや料理の準備には没食子、竹莊の兩氏、ホスターや道順貼りは潮花氏が鳩花氏を相棒に活躍。ホスターの川柳漫筆は拙筆、句は會員の作、書は先生を煩はした。生々庵理事長も往診中の靴を抱えたまゝ、多忙もいとわす顔出しをされる。翠光、小松園、葉、白柳子等の諸氏が次ぎ〜に出たり入つたり、副理事長の香林氏が大童で總指揮、會期二日前から、疲勞で引籠つてゐられた先生もじつとしてはおれず、起きて來られて霞乃奥さんと例のくくまざるマンザイをひとしきり、お二人とも始終ニコ〜と、うれし〜とくに動いてゐる役員達をみてゐて下さる、定刻一時近くになつて一同奥の天神の會場へ。

(古方)

★當日參會された方々、投句出席をされた方は申すに及ばず、當天會及び記念特輯號のために、特に物資による多大の御支援をたまはつた方々へ感謝の意を表する。會の収支報告は會員其他へ別便で發送し (不朽洞會理事長)

頭脳覺醒劑

セドリン錠

疲勞感除去、心氣昂揚 作業能増進、睡氣防止



大阪府道徳町武田藥品工業株式會社

# 農閑戲筆 (下)

鹿石木鈴

お彼岸の龜満腹の鉄をあびる

百石

この頃では龜も榮養失調!!

お出入りに値ぶみをさせるお

中元

三越へ来てまで砂糖箱に決め

源坊

お中元だ、お歳暮だ。兎に角うるさかつた時代だが、又なつかしいぞして一番安あがりのものが砂糖だつた。それが當時安かつた煙草と共に、今では闇値の王者となつてゐるのも皮肉と云へば皮肉だ。蟲干しに恥かしかつた日を思ひ

虹 二

金のある中は駈落よく笑ひ

宿帳にいつはり多き夫婦づれ

五花村

転出証明や外食券やなど調達し

てゐたなら、駈落はおるか、數日の戀の逃避行も出来たものではな

古城山

## 近作柳樽

ラッセル車白魔へ挑む湯氣を吐き鳥取市悟 志

二・一スト禁止さる

救世主神がよりでは出来ぬ業

三割は闇で收支を償はせ

青春を二合五勺でひだるがり

やましきはツイ網棚を振り返り

闇市場權索洩れの荷を捌き

呑舟の魚にはボスの後楯

ひし〜と三月危機は遅配から

悪運のつき縫ひ目から米が洩り

評判をきくながしてゐる札の蒿 石川縣義風子

亭主をもどかしがつて賣り歩き

野心まだすす田をうつ鉄重く

大往生虱も共に焼かれたり

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

片山かそうか少しは變るだろ

鞭打つて使つた馬に草ばかり

トツ辯な男の指の節高く

狙われてゐる唇と知るや君高槻市丁路

行列を無視して買へる手もありて

葬儀屋も涙で拜む心中なり

せらぎをジブの様に行く目高

ダンサーの胸がときめく男振り

教壇を捨て、儲ける氣にもなり

見合とは知らずモンペで居る 廣島縣露斗

はらみ牛賣られ行く日が近くなり

お百姓に聞けばこやしが足りません

初戀はわらびを折りに行つたころ

でこぼこのたゝみの上の壽命かな

半分は盗られるつもり街に植え 大阪府月都

服装のまづきが故にあらそはず

葉櫻にもう落ち着いた戀となり

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

不粹極まる世とはなりつれた。猫いらず外に愷氣の手を知らず

路郎

猫入らずなか〜手に入らぬ今日では、斷食戦術が最も經濟的で効果的か。薄情な亭主、女房の配給分で腹が充たせると喜ぶかも知れぬ。

鐘樓で坊主の戀は月をあび

鐘のない鐘樓で戀を語る場面は繪にもなれば詩にもならぬ。時の流れは「子供の世界」として用捨はない。

胃病の子繪本ばかりをあてがはれ

一冊十圓もする繪本をさう〜あてがはれもしないが、よくしたもので、胃病になる程食はせることも出来ない。

これ程に延びた去年の紺緋

萬よし

この句には、母親の喜びだけが強く現れてゐるが、今なら着せるものゝない惱みが強いだらう。

隣りの子菓子を見せると逃げてゆき

迷作

菓子だつたら、學童の配給送親がへつゝてゐるんだから、隣の子に見せるどころか、と云ひたい。

「花卉草木」や「鳥獸虫魚」篇にも時代を見る。

花吹雪下戸重箱の蓋を閉め

柳舟

茄子畑時の大臣おとこの母老人おばあ 朝顔の花まで届くシャボン玉 雄子郎 万よし

花見は出来るが、お花見なんて何時になつたら出来るやら。皇族方できへ休閑地を作られる今日、時の大臣の母老人が茄子畑に立つ

品質優良

ペン先・針ペン・セムクリップ

立川ペン先製作所

上野市

のなんか珍しくもない。朝顔の花も今では作りてが少なく、泥んやシャボン玉に於ておや。小鳥また大きな鼻に覗かれる 馬行 放し鳥見て施主の子は嬉しがり 美水 蟻の列落ち着く先は梨の花 光林坊 小鳥の音色を楽しんだり、放鳥に虚榮心を充たしたり、梨の花をやたらに捨てたりしたのも夫張り

お隣りは粥かシャモジの音がする 同  
 残酷な氣持になつて花を踏み 同  
 淋しさに塗れば世間のさわがしく 神戸市沙智子  
 思ひ切り泣かせてくれる膝もなし 同  
 縁談がかさなりあつた恐しさ 同  
 便箋へ雨の音まで書き添えて 同  
 よむぎつむその指先へ春の風 同  
 貯金帳下刺が止らぬかたちなり 和歌山宏方  
 軟らかき言葉豆さんおいもさん 同  
 ラツシユアワア女<sup>ヒヨ</sup>荷を背負ひ 同  
 失業の友豪勢なことを云ひ 同  
 納屋の藁矢張り姑の手にかゝり 金澤市三笑  
 呑みなさい呑むはど女やけてゐる 同  
 コビイングプレスを手傳ふ戀<sup>ど</sup> 同  
 成行にまかしまつさと子澤山 同  
 弟は煙草喫うてるようだつせ 滋賀縣柳三  
 貨車の數かぞえたくなる淋しい日 同  
 みそ汁の薄さは女房世帯じみ 同  
 切手趣味骨董物へ慾が伸び 同  
 叱つてる母の個性を兒に見付け 鳥取市穂波子  
 香具師の店十圓札に春の風 同  
 得票に敷居の高さ云ふとれず 同  
 貞操の何であるかを思ふ日よ 大阪市曙子  
 悲しき日娘の日のみなつかしく 同  
 手切金百圓札で支拂われ 同  
 日溜りに坐つて春を嗅いでゐる 洲本市鳥巢  
 また値上汽車に切手に酒煙草 同  
 霞迄脊負つておりる人に會ひ 同  
 人通り春の宵とはなりにけり 京都市春涉  
 十五石ですと時計屋蓋をあけ 同  
 キャンピング夜光時計を愛しつゝ 同  
 スナツプは戀を狙つてばかり撮り 大阪市恒良

ひつばつて來いは息子の適齡期 同  
 ユーモアを混<sup>マ</sup>マイクの交又點 同  
 女學生ばかりの汽車とすれ違ひ 七尾市晶二  
 からつばの頭へ今日の陽が當り 同  
 踏切へ思ひ出せない花が咲き 同  
 日本の女に還へる名古屋津山市茂穂  
 説諭きく方へもそつとお茶をやり 同  
 さくら貝も夏を呼ぶ色に見え 大阪市喜代子  
 主婦の日記同權と云ふ文字が見え 同  
 新法で認めておると息子云ひ 大阪市淡水  
 浴槽に配給の不平等一人ふえ 同  
 兩親の墓で引揚げ泣くばかり 吳市枝葉  
 ヤミ商人やがては立志傳の人 同  
 アメリカにあり相名の契茶店今治市文庫  
 恥づかし乍ら喰つた夢飲んだ夢 同  
 正直は小路の奥に小さく住み 堺市溪堂  
 將來を此のやせ腕に問ふて見る 同  
 過去悔ゆる身にくづれゆくばたん 神戸市まさ子  
 泣きぬれた顔を鏡へもつて行き 同  
 弟の手紙英語も少しまぜ 神戸市美代子  
 櫻咲く下を嫁入りの灯がつゞく 同  
 男の子ばかりと遊び僕と云ふ 大阪市牛歩  
 よく見れば一ケタ違ふ零が付き 同  
 顔一ぱいに泣いて歸へつた女の子 布施市醉月  
 空爆で死んだ彼奴が羨やまし 同  
 神様のおかげ今年も麥うれて 大阪府鬼八  
 床の中休むときめてタバコ吸ひ 同  
 保護色のまんま糞虫生き通し 豊中市柳堂  
 あたまかくくせがまた出る話すき 神戸市凡太郎  
 大丈夫ですと親爺はコール注ぎ 奈良縣寸葉子  
 ベラボウな値段で疊積んである 岐阜市周峰  
 散歩する頭へ蚊だけついてゆき 布施市千里

日本人。放鳥の序に

モーニング褲を待つてる家の前 悟 空

漬物用の鹽に事欠いてゐるのだから、清めの鹽なんて、近頃おやりになりますか。よほどのかつぎ屋さんなら、それも真似ほごするかも知れぬが。……

最後に「山紫水明」と「天象」篇。

沿線の百姓看板裏を見る 二柳子

繁昌の寺へと茶店續くなり 蔭 乃

力餅まだ頂上へ十五丁 松 園

奈良の春棘煎餅を嫁抱え 嘉 奈

見晴らしに團子の足らぬ人出なり 水 樹

團体が驚張りで鳴らすこと 啞 人

空瓶を残してみんな舟を捨て 竹馬人

沿線の看板は屢々其の醜貌をヒナンされたものだつたが、金鴈回取て姿を消し、力餅や團子を買つてゐた茶店はその殘骸だけを殘してゐる。そして糠煎餅の貰へぬ神鹿に同情を寄せるもいゝが、此の

頃偶々配給される菓子と稱するものが、糠煎餅よりひどいものだとすれば、當局は人民を昔の鹿より下等なものを見てゐるのかも知れぬ。石炭キンの列車地獄や團參なんて薬にしたくもない。空瓶を舟に残して來るなんてことは考へる必要もあるまい。貧乏はしたくないもの。

小説をむさぼる雨の移民窟 篇 二

海外よりの引揚同胞の何割かて通つた移民宿風景の句であるが、轉々感慨に耐えられないものがあるだらう。時は一切を解決す。こうした愚痴まじりの漫筆が、一場の物笑になる日の一日も早からんことを念じて擲筆。(二月二十日)

高純化材料容器には動然!  
 マギンの……

# 黒硝子

大阪東区大田町四丁目  
 西川硝子株式会社  
 山崎硝子株式会社  
 電話 四四七番

安産のために

## ワダカルシニウム錠

安産メータ・文獻進呈

大阪市大淀區豊崎東通一ノ四六 ワダカルシニウム本舗



# 同句二例

櫻井六葉

雲鈴齊百花丈撰、俳諧爾早  
咲(寶歴二年)、京で出た諸國  
萬句興行の(一)といふのを開  
いてゐる。

忘れんと芝居へ行けばそれを  
作者は山ヨド、東山堂とあ  
る句が目止まつた。これは

「いかにもくくく」の題に  
附いた句だ。よい句だが、サ  
テ何處かで一度見た句のやう  
に思はれてならぬので、近頃  
折りにふれては探してゐる  
と、果して有つた。

前田雀郎氏が「蕪村以前の  
俳諧」論考中で高井凡董の父  
凡圭の俳諧例句として挙げた  
中の一句だつたのである。

〔同氏著「川柳と俳諧」五一頁〕

凡圭は寶歴十年七十四才で  
死んだといふから、寶歴二年  
は六十六才に當る。東山堂と  
は別號で雲鈴の選に投句した  
ことは同じ京師に居たとは  
云へ、一寸考へられぬが、そ  
れでは東山堂が凡圭の句を失  
敬したものでらうか。それと  
も反對に凡圭の俳諧の中へま  
ざれ込むものでらうか。

書いた序に之は發句だが  
一つ。  
時鳥くとして明けにけり

は千代の句として人口に知  
られてゐるが、千代の句集に  
はなく、京傳は近世奇跡考で  
千代といふは誤りで

時鳥くとして寝入りけり  
といふは涼蕪の名句なり、  
と云つたが、之れも危しいも  
のである。といふのは家藏に

希因の眞蹟で、この句を書い  
た權軸があるからである。ま  
さか希因が他人の句を「金城  
下希因」と堂々署名して書き  
もせぬだらう。何かの集に涼  
蕪とあれば、今日で云ふ校正  
恐るべしの誤植だせせなくて  
はなるまい。

(昭和二、五、二五)

と、これは路郎師著「川柳漫談」  
昭和四年八月一日、弘文社發  
行の師の序文である。

「猶ますその道に精進したい。」  
此の氣持を有する事は、容易な  
事である。然し全べての爲事に此

の心を座右の銘として繼續實踐す  
る事は我々凡人では出来ない。此  
の出来ない事を、文化線上の一點  
たる川柳普及のために成し遂げら  
れ、又此の後と努力されると信  
ずる師なるが故に、此度の文化人  
としての榮譽を得られた事は、師  
にとつて次の飛躍に對する踏切臺  
とも考へられ、柳界のために自分  
は快哉を叫ぶ一人である。

前記書中の一篇「一ト昔前の大  
阪見物」は確かに價値ある文章だ  
と思ふ。いかに大阪の姿が變化し  
ようとして、此の一篇の裏に大正  
末期の大阪は、我々の胸裡に生々  
しき記憶を呼び戻して呉れるから  
である。心ある人にとりては實に  
稀書と云はねばならぬ。

「飢餓線上に立つとも我等に川柳  
あり」とは路郎師が川柳雜誌再刊  
の辭であり、こゝに師の川柳に對  
する情熱があり二タ昔半前に述  
べられた事も今も變りない事を  
我々は知り、頼しき限りであると  
共に、此の言葉は我々のモットー  
でもある。

「浴槽へすらり立つたは替わが  
子」の句主である路郎氏夫人の力  
を忘れてはならない。

## ある日の先生

吉田水車

たしが十九年の二月の事とおも  
います。信州へ行かれる先生に一  
夜拙宅へ泊つていただいた折その  
晩先生と久々と淺酌して早めに就  
寝した私がフト目醒ると先生の部  
室の方からウナリ聲が(たしがそ  
の時私にはそう聞こへた)して居  
るのでハテナとおもひ耳をすま  
すとかの英書やうなものを聲を  
出して讀んで居られるらしかつた

あくる朝先生に何ふと將來斯ふし  
たものが要になるから忘れぬよ  
うに復習して居るのだとおつしや  
つた。やはり何かの原書を讀んで  
居られる事が判つた。その時分と  
して先生の申された英語の必要な  
意味は大體判斷されたのでありま  
したが、しかし今となつてはもつ  
ともつと有意義な、そして暗れが  
ましいまでに必要な時代がすでに  
やつて来て居る秋、先生はこの道  
でも權威で在られると伺つて居ま  
すだけに、まことにその御達識に  
今更乍驚いて居るのです。

## 恩師への想ひ出

竹内湖花

(名古屋市)

雨をふくむ夜風を窓一杯に受け  
て柳誌を眺めてゐる私の思ひは自  
然路郎先生の上に還つて行く。柳  
門をくぐつて九十三年餘、私にと  
つて恩師への想ひ出は餘りにも多  
く、あまりにも温かいものであつ  
た。私の苦しい日何日でもその温  
顔が私の眼の中に浮び上り、私を  
勵まされた或る一面に於て親の  
襟に暮はしい日があつた。そして私に  
深い思ひ出として今なほ胸裡を去  
らないものは、何と言つても先生  
を異境の地へお送した日のことだ  
つた。昭和十三年九月十八日、北  
支蒙疆の民情視察、新しい文化へ  
貢獻されるべく、將兵奮戦の跡を  
尋ねながら川柳行脚の旅に勇躍老  
骨の身を持つて日本の地を離れ様  
となさる先生を見送るべく、大阪  
驛から省線に乗つた門下生達的心  
はゴムマリの様にはすんでゐた。  
空はあくまでも青く六甲の連峯は  
繪よりも美しかった扇港は風も無

# 阪田膽寫版

大 阪 市 北 區 芝 田 町 五 二

株式會社 阪田商會

く、突堤を洗ふ波の音が師を送る  
にふさわしいリズムの様に思へ  
た。第一突堤に黒く横倒しに黒龍  
丸の巨體、出船を告げるドラの音  
に恩師を乗せた黒龍丸は體を解い  
た。黒い煙は一筋太く長く流れて  
行く。船は棧橋を離れて音もなく  
すべり出した。見送る人々の歡聲  
はゴムマリと響くスクリューの音  
に交つて中甲板の先生の耳にこた  
まの様にひびいて行く。恩師の手  
に握られた日の丸の旗が、折から  
の沙風にハタ／＼と揺られてゐ  
る。「さようなら行つて來ます」  
「潮花君頼むよ」と言われた聲が  
もうやつと聞き取れるほどに私達  
と恩師を隔てゐた。何とも言へ  
ない感情がぐつと咽喉につかへ  
て、熱い涙が頬を流れてゐた。  
「先生……御氣嫌よう」ともう一  
度口の中で言つた私はそつと涙を  
拭つてゐた。眞晝の太陽の眞下に  
居て何日迄も、何日迄も此の棧橋

# 不朽洞會から

## 新會員紹介

四月 中川 鬼子氏 (福岡縣) 竹莊氏紹介

五月 吉田 溪堂氏 (堺市) 生々庵氏紹介

田中 喜代志氏 (大阪府) 生々庵氏紹介

六月 稻葉 鳩花氏 (大阪府) 潮花氏紹介

にこうして立つて居たかつた。ふとわれにかへつた時、方向を變へた船のために、もう見る事が出来なくなつてゐた。見送りの人達が棧橋を歩いて行く音を耳にした。白い小鳥が船を追ふ様に沖の方へ飛んで行く。鮎美さんや、かほるさん、紫香君達の聲も何となく小さく物淋しいのを覺へた。其れほごに長くない師の旅であるのに、何となく再びあの、温顔に接して無理を言ふ事が出来ない様に思へた。あれから、ひと昔、私が柳誌をもつ時私の眼に耳にあの日の姿と聲がハッキリ返つて来る。何じ眼のなかに、同じ耳の中に、恩師路郎先生へ交藝賞授與の報を開き、記念川柳大會の盛大なる催を見る時、又新しい、喜びが私の胸の扉を音たて、ゆすぶつてゐる。

▼石曾根民郎氏(松本)から、旬會は二十名内外を毎月保つてゐます新人を見出すことを心掛け、ひとつのグループの鼓にとちこもることを極度に避け、われ等の作句方面は奈邊にあるべきが至當なる

やを常に反省し合つてゐますとのこと、その調子と云ひたい。▼浪玲之介氏(大阪)は今春から紡績機械に全力を傾けてゐられる由、邦家のためフロントを祈る。▼竹内潮花氏は六月十三日に催された日立造船の慰安會に、中央公會堂へ出演、京藝者に扮して京の四季と春雨を舞つたそうである。須明るいことかなとある。▼須崎豆秋氏來洞、例の調子でボツリツとしたモーニングで出勤したのた、「見合でもするのさ」と聞いたら、「何云うてなはんネ。これ見とくんばなれ」と、腰辨だ。春廣が底をついたのであるとはなさない話だ。▼上田翠光氏は四月十七日に嚴父を亡くされ、五月には令妹の結婚、悲喜交々だつたこととお察しする。▼六月一日の

大會には顔出しをするよと云つてゐた、横濱の福田山雨樓氏、滋賀縣の北川春集氏、浪玲之介氏、岡山縣の濱田久米雄氏、滋賀縣の鈴木石鹿氏等何れも差支えて欠席、會員を淋しがらせた。▼出雲市の尼條之介氏や岡山縣の大森風來子氏等は万難を排して出席組。▼贊助の中田守雄氏は府會議員に當選されたお欣び申上げる。▼岩崎柳路氏の京都の勤務先へ路郎師が訪問された。▼山路閑古氏(京都)をさ

本會の調友に推薦、快諾を得たこととお知らせする。▼松江市役所に勤務してゐる勝谷山川兒氏は今度課長に昇進されたと同時に、市役所川柳會が生まれたいのこと。

# 川柳不朽洞會

指導 麻生路郎

贊助 池澤樂居 長谷川一徹 笠原路生 高嶋米峰 長野晴嶺 藤野晴濱 藤原退藏 額原一藏 淺田一藏 末弘太一郎 中田守雄 白川朋吉

中村祐吉 高安六郎 藤村雅光 鳥山一步 沖野岩三郎 龜井花辰 川村孝之介 高尾亮雄 生方敏郎 山本雨雄 安川久留美 山路閑古

前田五健 榮谷幸二郎 蛭子省二 西島〇丸 藤生霞乃 橋本綠雨 高鷲亞鈍

井村寒浪 上田翠光 米本貴志 大西八歩 福田山雨樓 西田紳榮 水田里九

藤井友郎 三輪晚翠 内藤草一 水谷鮎美 村松夢裡 大坂形水 平佐平三 藤岡至美 西川青三 井上湧三 仲本玄同 中原鏡人 橋本波夢造 石浦西花園 谷崎利男 岩崎不二

井村寒浪 上田翠光 米本貴志 大西八歩 福田山雨樓 西田紳榮 水田里九 寺井銳々 高澤一浪 石井白面人 戸田古方 古川風竹 前山北海 古川麗花 岩崎山石

藤井友郎 三輪晚翠 内藤草一 水谷鮎美 村松夢裡 大坂形水 平佐平三 藤岡至美 西川青三 井上湧三 仲本玄同 中原鏡人 橋本波夢造 石浦西花園 谷崎利男 岩崎不二

西垣錦風 市場沒食子 吉崎豆秋 宮岡白峯 石曾根民郎 中西おさむ 正木水客 黒川紫香 竹内潮花 北川集川 布施筑川

尾崎方正 佐竹香附子 關根山彦 西尾不水 櫻川久米雄 濱田中仙 好崎大研 杉原小松園 菊深小松園 逸見灯竿 清水白柳子 鈴木一九坡 夷木一石逸 高田抱逸

小川恒明 德永雅美 八竹正柳 森風來子 河野大東 河野大東 森風來子 高木勝東 坂井水勝 村上角堂 岡崎王泉 木下幽一 巽無洲 中島鐵一 川村好郎 新川博也 橋本奈也 尼綠之助

水谷竹莊 淺香憲三 水谷琴水 熊本泰景 山根泰人 小橋隆如 勝谷山川兒 岡崎祥兒 吉岡選慶 弘津柳慶 中川鬼堂 吉田溪堂 田中喜代志 稻葉鳩花

マカツ キーブ化粧品

乳白粉 口紅 透明粉 白粉 三色液

チマーロク クロリー台座

マカツ化学工業所 大阪府大津區本在川崎町

化膿症に スルファミン酸 デリマン錠

アルバジル錠姉妹品



# 六號室

路郎生

▼前號は大好評だった。お陰で販賣率が一步も三步も前進した。「遅刊の理由も判つた。やり悪いだらうが大いにヤレ」と激勵されたことは多謝の外なし。▼本號は小生のための特輯だ。おもはゆいことも書かれてあるのでいささか恐縮だ。氣に入らぬところは飛ばして讀むべしである。▼普天氏に凹まぬ人と鑑定されたが、オレは人情には大いに凹む。凹むのはタバコを興へぬことだと念所をつかれた。實際タバコが無くなる、この世の中が味氣なくなり、仕事の手につかぬほど凹むのである。その代りオレにタバコを呉れた人たちは間違ひなく慈善家の番附に乗り、極樂へはいつ行つてもよいやうに豫約席が取れてゐるから安心していゝでせう。▼配給制度以後小生にタバコを恵んで呉れた大株主では、跳二氏、立岡子氏、生々庵氏、香林氏、翠光氏などであらう。一ト株や十株位の株主は枚舉にいとまがない。金澤では三笑氏、久留美氏、登良久氏等が新たに株主名簿に載つてゐる。曾て空襲下に、五女のりしが「お父様タバコを買つて来てあげたよ」と云つて、一貫目あまり持ち込んで呉れ

たには、流石にドキッとした。白秋氏のけむりやけむりの唄が思ひ出される。しかし、近ごろゴムのやうなタバコを配給するので、これには凹む。私の凹まないのは、川柳の上の主義と、決意の斷行、行くところ上ら少々病氣でも行く。しかし凹まないためのギセイもかなり大きい。▼片山さんが首相になられた。僕は黨人ではないが、片山さんの眞面目な態度には好感がもてる。みんなが協力して片山さんの肩の荷を軽くしてあげたいものである。▼僕は永年筆で飯を食つて来たが皇室に關する記事ばかりは苦手だつた。チツとも感激が湧かないからである。雲の上から人間の世界に降りて來られた天皇のために、どれ位僕は親しみを感じたか知れない。いろ／＼な束縛がほぐれかけてゐるのを知つて陛下のために心からお欣び申上げてゐる。しかし、まだ／＼ソクバクは大きい。側近の人たちは心すべきである。▼本誌の表紙は特に田村孝之介畫伯を煩はした。味つて欲しい。▼蟹の目川柳社の一周年に招かれて四月廿三日に、金澤へ出かけた。戦災都市と、そうでない都市との差をハッキリと見せられた。何と云つても金澤のやうに焼かれなかつた都市は幸福である。文化の復興にしても焼かれなかつた都市の人達はウンと力を入れて貰いたい。従來の行きがかりや、觀念を棄て、日本を背負うて立つ意氣でやらねば嘘だと思ふ。北陸柳壇の大先輩、安川久留美君が朝から顔出しをして、毎日のやうに、そこらを引廻はして呉

れた。僕が昔泊つた鐵車と云ふ古風な宿屋が洋館の湯屋になつてゐることも、久留美君の案内で知つた。金澤の地は四回位踏んだと思つた。最後に行つたのは十五年前の四月十七日である。兼六公園の櫓の下で、縁雨君と、今は故人になつたかほる君と三人で撮つた寫眞が最近出て來たので日時まで知ることが出來た。大會は二十七日

## 募 集

每 號 募 集 (毎月五日締切)  
近作柳柳雜吟廿句 麻生路郎選  
川柳塔 (雜誌) 麻生路郎選  
文章 (評論・研究・感想其他)

### 投稿規定

▲投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雜誌を明記する事。  
▲「近作柳柳」は一般作家の雜吟を募る。  
▲「川柳塔」への投稿は不朽洞會員に限る。  
▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

でなか／＼の盛會だつた。選舉月でなければ、もつと接近地からの参加があつたことは確かだ。昔の川柳青年も、今は縣會や市會の議員に立候補して騒いでゐるので、本人は勿論、關係者の柳人までが、句會への参加を堰かれた。選舉月を考慮せず、ゲン／＼、斷行した蟹の目川柳社の幹部の意氣を壯とする。今、金澤では冬宵、紅の花

白林の諸氏などが活躍してゐる。登良久氏や三笑君などはよい後援者であらう。森の家君や久留美君などは何處までも參議院組だ。六葉君もその組だ。僅に櫻が残つてゐる公園の旗亭で舊交をあたためた。身輕な鬼水君はさしすめ働きた蜂の形だ。シツカリやつて貰ひたいと思つてゐる。この外に甘茶の美瓜露君などがある。僕は昔「川柳雜誌」にゐた西本三笑君のとこへ泊めてもらつた。三笑君の二男坊の安路君が榮町中學生川柳會を牛耳り、「海鳴」といふトリーシヤ版柳誌で同志を集めてゐる。「父はあいかはらず酒がすすきです。先生も体をこはさぬ程度に飲んで下さい」といふうれしい手紙を呉れた。「体をこわすほど配給して呉れないから大丈夫だよ」とこゝで返事をしておく。親父の三笑君は「川柳雜誌」を早く頼む、熱望家

が矢の如くさいましくしてくると云つて來た。天長節の朝、金澤放送局から「手をさしのべる川柳」を放送、三十日の夜行で歸途についた。いろ／＼御高配を忝くした方々にあつく感謝する。▼本號はこんなことを書いて一般の消息をギセイにしてしまつた。

## 川柳雜誌

「川柳雜誌」の再刊舊號  
定價一部五圓送費一二〇  
大正十三年本誌創刊以來のバックナンバー(但し欠號あり) 菊倍時代一部十圓送料共菊倍四六倍時代一部六圓二〇送料共  
御希望の號數御知らせ下さい  
乃至急有無とりしらへ御通知  
御注文はすべて小爲替のこと  
大阪市住吉區万代西五ノ二五  
發賣元 川柳雜誌社出版部

## 川柳雜誌 第二卷

B列5號 毎月一回一日發行  
一冊 金 五圓 (送料七拾錢)  
牛ヶ年概算 金四〇圓  
一ヶ年概算 金八〇圓  
昭和廿二年六月廿五日印刷  
昭和廿二年七月一日發行  
大坂市住吉區万代西五ノ二五番地  
編集者 麻生 幸 二 郎  
行印人 麻生 幸 二 郎  
發行所 川柳雜誌社  
大坂市住吉區万代西五ノ二五番地  
對岸日原大坂七五〇五〇

新治療期 結核

ネオハツモン

コメット

黒田製藥株式會社